



開國起原

特
リ毎 5
2110
39



特
U5
2110
39

開國起原卷三十八



開國起原卷三十八

安政年間邦内之形勢上

長治之地

長多

清奉行極々

一夫アリタニマの女王の教意より其一身の向

と共ニ衆議一語して彼の魯西亜國より歐羅
 巴を押戻さるの事候あるを以て歐羅巴の為
 防禦せんと欲して魯西亜國より此度軍を棄出
 はん事柄ニ付告知の書面寫差出申候事候
 兼知つて申候
 一此軍ニ付向て幾久も次有る相候事候
 一教多の軍勢既ニ合戦ニ差出申候
 一魯西亜國の軍勢等を計策所果不得止其自己
 の港より引退し潜居候
 一魯西亜國の諸街致々所々ニ入威を荒廢せし

海舟書屋

の以將又魯西亜國の内トルコニ境界せし不
 且於るを即トルコより魯西亜の軍勢入込候ニ
 付伐退け候事散々の敗色より退去ニ及ひ候
 一右に通り領意ニ有る候事今般變候いあり魯
 西亜の船を若ハ勿論其通方の高館に在り候
 事ニ入込候を滅却いあり候事心候ニ候事魯西
 亜國を漸く其境界を度免ナガリ候事
 一此般變の子湯ふゆ及候し候て日本ふも志あ
 り事ハ明的顯候の事ニ候
 一大ブリタニヤ女王の意より海軍の大將と

101
して私美東方海上ニ奈軍の命有る即此一事
の私勢只今此地ニ存立尚右一件の多外ニ
も数多の私勢出掛る我ニ此を電る度ニ日
本の諸港ニ来ル我ニ存る勿論是も魯西亜の
軍私威を右魯西亜方より正奪ル私も存る
時を是を妨ル為る勿論右等も南洋諸國の
港等ニ在ル我も存る事ニ存るを大ブリ
タニヤ國而已の類意、是も同國一語の向一
同の類意ニ此私美入涉國意也
一右松久次才ニ此度ハ故友ブリタニヤ國奉行

海舟書屋

不の心故ニ此を親睦の旨を主として何年日本
國帝威を其從属の尊貴の方ニ對しての軍戦
等の美心の及ひて相成丈々相避ル振仕度志
願ニ此先朝の如き心故ニ存るニ付るを正
余美情合ハ波分日本終ハ事以不ハ勸考下
洋南國港等ニ此存る一件一味の者存ル我
ハ免許ハ度ハ振不希也
一右々預合ニ此度ハ若くは振ハ合彼是故合能
相惹若端のハ是事ニ振下若事ハ支ニ此度振
相成尚長崎港ト勿論日本國領ニ港及ハ其他

の場不ニ存出ム其相叶ム概仕度心種ニ此度
ム

フリタニヤ女王の私ウ井ンセストル 号ニ於ク

曆教千八百五十四年九月七日 安政元年 宣
同七月十五日 宣

スコウトベイナクト 名

大將

ヤーメヌステイルリンキ 名

右エケレス語 阿蘭陀語ニ翻譯仕ム

かひ多ム

海舟書屋

中々々々々々々々々々々々

備忘

長崎本邦ニ相達ム

書面ニ類々魯西亜ニ不限外四戦章寫キ物ニ
中々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
失し且ハ眼を更ム所ニ當リムとの意味合社
ニ中流通海通航ニ食料薪木亦亦又亦亦亦
彼彼亦ニ亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦
能事不ニ限リ亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦

次書もこの下田渡と見洋の面も不苦のそ外
之渡と瓶屋評者中論の板下之渡の左のり、
彼方より見出の書面其後瓶屋意も有る
この書面引留の元又と相違し為見出の板
も之と有計の其後三々条を類と伺へ通へ
相心流の事

別後達

英吉利より申立の額二面と船繋之見瓶屋評
の書彼方より見出の書面引留の元又と相違
この後別紙へ通相達二面と英吉利より

海舟書屋

見出の横文字の書相違の中要別附痛次未
忘不流のるお長次書よく見出二面と有る
事

別後達

此度英吉利渡来二舟のハ當地より別後意接
之者ハ不立見差のる永井君之巫中後十子
之と有計の志中述と至之の流に後意二不相
成板厚く相心流極便二板板の板下之渡の事

書面之版評議仕の要初々条咲咭喇回之

私魯西亞國之戦争ニ付同國之船を妨
ムル者又 津國之諸港に船繋止る免
ト云々魯西亞之先達ニ直接ノ交渉モ有
之其免之ノ事亦亦預ル同國相成ル
而モ進ニ魯西亞ナリ 津國ノ對ニ心
以怨之を合み不ヲ沈ムルイフ色ナク
同國強ニ威福ニ以テ一向ニ以テ相成
ルノ事ノ如クナリ同國ノ有ルハ嘆咄
事故不法乱妨ヲ及ボル強計定以テ大
會ニ付再愈厚ク評議任ル要進海通航
ノ事

海舟書屋

其食料薪水等支又ハ船中後等ニ由テ
是邊ニ當ル船主ニ以テ同國ノ有ル
以テ在外國戦争等ノ為メニ中立ニ其
免許ルル者眼モ無ク同國ノ信義を失
テ眼を受ル者高リルニ之ニ意味終
論一若書面引留ル者相違ハ免出ル
ニ由ルヲ兼屈ニ由テ免之者長崎箱館
所ニ限リ免許其上ニ由テ免之ル
免之免許ルル者其外ニ免之強ニ免許
其餘ニ由テ免之額ニ由テ免之通
其

寅月七月

評定所一産

浦賀幸次

林 大守氏

大 目 月

海 防 掛

下 田 幸 次

比 目 月

比 目 密 中 上 公 様 文 字 和 解

海舟書屋

爰小一伴の類を記さん事を欲され其
時概ふければ巨細の書記を事甚難し

一 蕃民を何國の人ありて交りし其厚薄をあれ
とも差別なく我ら家族と知るべし且我一家
族の事情を其他の家族へも及を應し

一 當時世界一統混乱し今支那の亂起る
其願所の官位を墮さんと欲を其由り亡命を
る者日く中人を教ふ

一 魯西亞國帝をギリシヤ國宗門信好の事ニ付
條約せし其社中の首長として守護すへき也

却る其條約に背き理不承に戰争に及ぶトル
 コ國レユルタン名官の支配フアルステン名法領
 のワルラグケ名地モルタフ井名口を押領せり
 因てトルコ人教多の軍勢を發しトルコ國海
 軍魯西亞人のため敗負をとりて陸軍に
 於てハ利有て大抵魯西亞勢を逐討せり魯西
 亞勢の主將最智謀あり者三人死を福の底を
 負ひけれハ軍卒の威勢も衰へトルコ國方
 大將ヨームルパス名人ハ謀畧多くして勝利
 を得ありエケレス國茶フランス國の政庭を

海舟書屋

魯西亞國とトルコ國との條約取柄の時其證
 徒ふして條約を保修せん事を定めより因て
 其兩國の政庭一同條約を守らん事を交心し
 兩國海軍の門強勢の一組をハルデイフ海に
 發し魯西亞國諸港を包圍み外一組を黑海に
 備へより右海軍隊をエケレス國マトミラー
 ル名官ある人の旗下としエケレス方茶フランス
 方熱陸軍勢をフランス國フェルトマールレ
 カルク名官の指揮を受け大元熱軍艦の門大砲
 七十四門より百三十門備のり一ニ一砲七十

被外ニ蘇軾フレガツト初故多あり當時如張
の陸軍勢を凡八万平常フランス國ニ於て用
意の軍勢四十万是ニ又相當ニ大砲其外武器
等を備ふ

一當時ニおのゝ魯西亞帝の遠約を制するを
專要とて且諸侯并政官の者も亦同股ニして
別ニ不協を加ふる事あり右遠約制討の
混雜おけれりエケレス人英フランス人日本
と和親を以て依んる先最早海軍勢を日如く
向たるへしゆゆとあり

支那ニ於ても其例ありしゆく一國の主外國
人と条約を結ぶ時と又他の國主も使臣を向
け同様の條約を結んと欲するに顯化あり是
を以て一國主は條約を免して外國主は免さ
ざる事疑くも主平等とて是の時と事疑るの事
あるに一國主の両方あれハ又外國主も條約
の願意を以て假令干渉の患あるとも其類を
厭ひ力を合はへし今魯西亞帝を我々小知
察するに愛し愛りて唯獨主の主多し人事を欲
それ大智策と云ふはありは然れ其大威勢を

夫の人其諸人勸考する要也

一 追説ありハ長濱の港ニ泊来セシ魯西亜國海
 軍一隊の將フイーセアトミラール官ポーチ
 ヤチン人瓜哇中スラバヤ各島ニ在りて和蘭出
 張の政官の守護を請けエケレス糖フランス
 糖の障害あり其事あり其所以ハ全船和蘭國
 々フランス國エケレス國ニ依怙あり相互ニ
 諸件の糸物をも結たればあり
 一 エケレス人フランス人々魯西亜船をおも
 り多め諸邦を控臺シ日本にも泊来セシ事お

海舟書屋

是ハ魯西亜人々其戰事終るを得んハ其意
 船を逃避する事甚難り日ハ一若シ魯西亜人
 長濱港ニ在るをエケレス人又ハフランス人
 見受け其港内ニおぬる間賊ニ及ひぬるは其
 流弾等より日ハ終るに命する者あるを
 是全く日ハ終るに親友信の事おきり故に
 れハ是を以和親の所要あり事を知るを日
 本和親を結ぶに倚偏あり事等する時々其
 海上も至事来強して為強せらるるハ
 一 支那ノ沿海ニ諸國の船々々來常軍艦を守

獲として矢向け板垣の條約違背なく有るを
 人事を司らむ依り若し計戦卒後をり時を
 エケレス四フランス四合衆國或は魯西亞國
 何れも敗北し私に強美し及ひ日本北港に隈
 色兵を軍濫し見頭ハさるる事もあるへし
 惟れハ日本に於てハ何國にも倚偏なく平等
 し和親を結ぶ時を外國人日本の地を借ら以
 して自國にて戦争し及ひ日本海を安穩ある
 へし故し和親をも結ぶを最肝要とすへき事
 之期ある時を外國人の戦争あるとも日本に

海舟書屋

關係なく有事安寧之憂し又日本最安穩全を
 計りし唯一國より諸國と和親を結ぶへし其
 所以を日本と和親を結ぶる國々の間若し日本
 兵を發せ萌あはれ外國より和睦を明入る
 色也

我爰し書記をり事の若後々余ハ我自己の
 不存あり公私の評判記を授釋しある
 色のと知るへし

一世界中評判記所要とをり色に二あり則ハ
 レイスのフランス國
 都府に於てモニテール
 洋日に出

扱をる所のを此あり右評判記中よりフランス
 人系世界中の人氏に才三世ナポリラン
 の教示を記し且官人顧問をる々条を解き流
 あり尚又ロンドンのエケレス同都府ティームマ
 を所要と依エケレス同より於てを扱列をる々
 甚隨意小して其扱中より官長の顧問をる々
 を託しあり右兩國の評判記館中亞墨利加國
 評判記を支那より送るあり我其評判記を心
 を用ひ誦讀しあり

一 當時のインフレーション 蘇我仕掛 を發明し右を便

海舟書屋

利此をのよてエケレス人フランス人其仕
 掛の如く驕馬を十々条として外國に運送以
 一日本を禮義正しく智才の地おれの二百年以
 前の規律を述ぐ改正をる扱をる全稱日
 本支那東亞度サンプラニスコ 合衆國カルフ
ヲルニヤの國
 の中間より在るハ改正をる事成り難きとをる
 ありは日本の私人憲法より送る時を其兩命
 を神佛の加護し任るとあれを外國の人氏を
 是を憚る事能はば是皆人の知る要也是を以
 考ふれば日本其流を外國人のため困免さる

るは正道と云ふはあり民間流の道なり
 一 外國の法盛なり其學術を勉勵し生涯を安堵しさるれ事を計り諸物件を度明し其効力を得る事ありあり

一日如く外國の發明せし事英煉磨の功にて得る事を學びんと欲する時と歐羅巴或は亞墨利加風し做らるる一竹軍兵を軍學に達し多し將の配下し備ふるは國王安穩の專要とす所之今軍兵に軍學を教へ其取引を外國の如くおを時し於ては軍兵の亡失も何れあり

海舟書屋

らん是是牛痘種植の事を以て考ふへ日本は終く内治外治の事を能く量知し良薬を用ゐ時と惡病疾の患難を免るる也

一 物中評判記中記論を以て日本改正を以て智慧を以て是る事所要也を緩くふして一時に是る事ありは國の規定を變革せば固守するを為しは為るべき也

一日如く外國と交易を初るとき日本存続の色を添し要用とすは色の變ハ米麥粉或は小麦を日本に運ぶ時と食料此色の不直し成

るを以て右代として塗をのを酒さハ塗物作の
 有蓋とあるへし食料の價下落をるを農家の
 強深あると思ふを懸ありぬ何とあれハ農家の
 了於て米穀の代り國人買求る所の羊皮を極
 へ或々羊を飼ひ其毛を以て羅紗を織るへし
 一交易を同じ盛んよる時を出入の運上令日
 本帝の寶庫は満ち海軍陸軍兵を養ふ事容易
 し日本々島國おれハ海軍警を備用とす事最
 肝要あり若海軍の備おく戦事よ及ぶ時と其
 周と石圍らるへし

海舟書屋

一日本人ハ水夫の業具り在れぬ僅の交易よ
 ても閑き且帆並蒸氣仕掛よて航海の幸免と
 寸んハゆ何して其業を以て事を得るにや
 一土地相當の交易をぬる時ハ其交易の果と
 あるよありはエケレス國よ於てハ王威ハ女
 王當時大よ尊敬せられ且常に安寧又大舊家
 あり交易繁栄して世界中最高とあるをの
 あり一併詳説して威侮甚し
 一日本も亦合衆國フランス國エケレス國よ倚
 り勢力を以て其威勢を起し土地繁栄改革の

事を計らハ忽ち法蘭とあるへ一若魯西亜帝
押腹の時より日本其防禦をおとす力望ら
されハ右三國の護守ある也魯西亜帝も兼て
自國を強大し其威を揮はん事の志望あり
ハ信義を信し事容易ありさる事也

一合衆國の規則ハ外國を押腹する事制禁せ
エケレス又四フランス國其他諸國より於ても右
國も其領土の命より従ひ治免随意に交易する
を良事として外國を領土するを利あり候と懸
察せり其所以を我領地とする時ハ其由り法

海舟書屋

士等を備ふるに心勞あり且許多の出費あれ
ハあり然れども東平度の地より於てハ人民情弱
よして大抵自國の首長令をおさしエケレス
國或は和蘭國出張政官の号令を待しとあり
右を通詞官ポルトメン書生を以て申上ル
し身和解仕ル以上

堀 達之助印

志筑辰一郎印

安政元年寅九月達

長崎表に酒米之英吉利船浦國地に船繋ぐ美
預知也 浦國法望相守に領中互に依る向渡
長崎表箱館之為港に船を寄せ薪水食料等船
中欠乏之品を相濟し候に是は洋相成去月廿九
日彼船不殘退航いよしに此後諸向に下り達
也

同年十月十三日

此度亞墨利加合衆國下田箱館為港に船繋ぐ
美は是洋相成に自而之紅毛國之美は是來
通商津免之四柄ニ付以來航海來往之砌下田

海舟書屋

箱館之為港に船を寄せ薪水食料其外船中欠
乏之品を寄し候破船修渡等想しに亞墨利加
同様に是洋有之を交易之美は是通商長崎
表に限り也同右に規定深望く下相守旨に
留申比丹に中渡也此後為心致向に下り
達也

同年十一月廿三日

長崎表に

來春阿蘭陀申比丹乘上之客に候不意之天
災雨之大地震津波ニ由宿破損候家等夥也

此年三月之諸國各城郭皆中搖動之破壞之
 其春甲比丹系上之頃近其修後同之合中弓交
 右伴破後之城郭多年其通高之國之在外國
 之者以一見為波之也何之有之宿驛疑混之
 之波之者其教意各限之相心得國之大地震
 之康之以來春系上之辰系上之板之
 之中波之率

同年十二月廿七日後 師所仰出之水之類
 魯西亞英吉利亞米利加國之條約寫入

敷覽之及民之之及至極端之外

嚴感亦為立之遊 序年心十萬之苦勞之小侯之天

思名六年也所成也不一通之心身之外掛之、面之、骨折之

儀之 序祭云 思名之古閣白殿之障之派傳美之流也

中國之起所司代之、中起之言

安政二年乙卯二月

松若何至也

海舟書屋

此海津用二舟東西航夷地西左乙部村東左
本古内村止島之在一内上知也 作舟之習
地之及之遊白之、夜下移之、當等之、美之、山
沙活之、有之、也
右卷中列座備者舟中語之

長崎山奉行

荒尾石見与極也

拂朗西指揮後より 語及之、風說書之、也、重、互、也
康振萃仁之相考之、右之、日本政府、下、於、白、肝

要二つ方々依る事見上ル

右へ通謹と事上ル

卯二月

かひるん

中んふまゝの事あり

非常風説

黒海迄乃魯西亜若セバスタポル名のを拂朗
西嘆咭喇方より海陸共百圍り此若迄一於
而魯西亜人との戦三層あり一は拂朗西嘆咭
喇方勝利を得たり

海舟書屋

魯西亜人々彈丸六十を殺後一三百名ホシ

ト一ホシト名皇四の火薬を費せり魯西亜方

の死亡名員二千人と噂り

地中海及び黒海に於て烈しき風波の爲に拂

朗西嘆咭喇及び都里格の船々大に殺亡せり

一千八百五十四年正月安政元年寅魯西亜

カムシカワトカ名の港ペトロポロウスキ

一一致の嘆咭喇拂朗西教子の軍艦上陸し攻

奪これ魯西亜方多難なる故再び兵船せり

此時ペトロポロウスキ港に繋りあるは魯西

亞フレガフト船被殺コルフエツト船九被運
送船被殺あり

魯西亞運送船アナデル号船嘆咭喇拂朗西方よ
り焼亦せられ外一艘レスカ号船を押腹せられ

し

此時カムレカツトカ名地海に在る處の嘆咭喇

拂朗西船を左に記す

フレシデント

オプリカド

ファイラゴ

海舟書屋

フォルテイ

ピキユエ

エウリテイセ

一レウス名地の地峽堀通レ成能をへ

一オーステンレイキ國を魯西亞國を敵として

嘆咭喇拂朗西方を據せり

一オーステンレイキ軍艦を五十九番四千人ふ

して大砲六十八番六千挺あり

一魯西亞軍艦を六十九番五千人あり

一大砲三千挺備のセバスタポル名器を以て著し

能といへる冬中咲咭喇拂朗西方より百圍居
たり此双方の戦年張糖ふして挽みおく見へ
多り

右へ通申上へ

ひひん

せんくさきゆさきゆ

佛朗西兵咲咭喇私將より兵出へ

撰文字和解兵上其外面計方より交々伺

ひ書付

海舟書屋

荒尾石見也

此為海東仕へ佛朗西私將より私に撰文字
書稿兵出へる生留申比丹に申月蘭語ニ翻譯
為波和解申月撰文字之別海船次より方より兵
上申へ右へ因港へ兵ニ付破損修復兵薪水食
料其外入用へ呂々兵度申頭此申立へ此兵咲
咭喇昨年申出へ通魯西兵と戦年中鯨漁私襲
へ魯夷防禦を要務といふ一同志へ私く多
免逃避へ一流未度飯ニ兵此へ預意へ基中夫
張戦年へ幸より私へ兵ニ申方へ兵乃去也

二ヶ矣通高之文章等之公以之職事記言論
 公事即在於此公以之國港也免其職公之
 少昨秋也其果之也教意之通職之為之中心
 而之職免其職等之也說破之任之幸好公右
 書面中立之板之考世度也夫同時漸來且嘆夷
 業之鳴論之公率及系考任公以之昨秋尚不
 而約定之振合要細佛夷之通考之業之幸好公
 召嘆夷同板長冷箱鏡之也港之私禁也免相職
 以之兼語之任也第一彼是中立公之同時漸來
 之業之業故也夷一席之也其接論之公之也

海舟書屋

漢史定之任也之書好公係書面之門其任之當
 り不中と有之給向之也幸好公係書面之門其任之當
 此座公以之都日端中板振之勿論願之板英
 夷通之也免相職公之類也公以之任公以之左公
 以之通高之文章之容易也打消之中心幸好公
 一二ヶ条入用之品之と有之公之私也免職公書
 編系考論公以之種之雜物也籍居公之業之也幸好
 以之取中必用之外也種相職該判之任且食
 料薪水等為其之受之也中立公之免職公昔中達
 至公以之國港也免相職公上之嘆取同板賣論

心積り二相心故

一嘆吉利取將より免出公書簡詭誤和解為治公
 要官より命を清貴臣調印之約書持余為五替
 之由免取治是公版中出公二有与先達伺面
 公通出連判之由書面亞是公蒙出度公以早之
 出也二相成公板任度也何板之由子候二与
 出也一有二相成公式由書面初云以恭意接任
 公長之右等之否心治后候也談判不任公而之
 第一波之疑心引起公由難計公有社候事伺公
 下田洗之参書面二之相見不中由治在社後若

海舟書屋

中出公以之成文免押一之由公治在至金次
 才相成公以之免私永永井若之取より約書為
 取替也之由右之次有之由知り公以佛更之
 方も同板之板二之任由事候公右若之取在申
 後此版事伺公早之由下知由度公板任度事候
 公依之和解四冊英漢文和解三冊相添此版事
 伺公以上

卯三月

書面之談評議仕公身初之余佛調西之参候

之為免之中心而之難免後密重二也說破
 以由一且通商之文字之打消嘆咭利通り出
 免相成以該を以該列之任との免菜二十余
 食料薪水酒方亦不相商之免也相見不中
 君伺之通正作酒之酒三々余嘆咭利條約出
 本書之系列紙出未文以認加へ子之免立
 相成以方之免也免在下回之免中出也
 何故之也同不之國港不設板石計免之全余
 免次免之免り免免之免條約附録之免為免
 暫在之免中免荒尾石免是免之免作酒之免免免

海舟書屋

公

卯四月

大目付

小目付

當沖酒未之嘆咭利新將其外去月廿九日西出
 後所之免也永井器之免淺地一學之合及而會
 乘中主之免有之免於免書面之免被回主之免り
 免氣免翻之免之免中主之免昌早遠江府之免中上
 音中酒且又被回之免之免未之免長保之免沖之免
 入不設入帆海之免之免之免中主之免免免免免免

取替之也相成以爲故先達中上並以通向後高
 詳爲恭疏泊之場不也相繫中台申酒其後
 條約翻譯和解等二句文意粗語涉一且双方意
 味遠之康正之後年故障正之振是正意之談判
 仕公以於右亦之至再意取將以及對談添書
 等爲取替且又津渡五爲等二句約案二粗語ハ
 多一公始末及尋向ハ交心以遠之報二句以後
 右取之爲爲治爲受候申固ハ右對談相海ハ後
 條約爲取替申ハ右ハ右見也席府ハ長持意仕
 取上ハ申ハ此爲七條約爲取替相海ハ義二句

海舟書屋

取將初ノ士官通各人等近相意之料理是出且
 一昨年魯西亞人昨年嘆咭利人ハ此下物之振
 合見合取將始ノ案組士官以上一同通各人近
 江別紙品書之通江府より取下ハ報之ハ若之也
 一學立合申酒ハ要更加也極難有音申立ハ
 一去ハ朔日右條約爲取替相海ハ後移音取將外
 通各人ハ四人候又西ハ役不ハ在出茶同振若
 之並一學立合及對談ハ市中見物並調也下
 田箱館二句之自候二相成ハ昌當漢二句ハ同
 振市中徘徊ハ多一爲音申立ハ二句兼也其地

こころに控へて後へ一と有るを右に美と云下
田箱館ニ白免許有るは其當港ニ白を強相成
額轉々中論ハ委美御仕ハ且示彼國取々不肖
其ハハ二月被回取ハ諸島之長為見合諸取
中ハ為取留ハ條約去月晦日不違本國ハ相
送ハ昔中同ハ

一魯西亞條約寫出諸方ニ有至墨利加ハ彼方より
諸取魯西亞ニ戰軍中故也ニ入列々々ハ此
方より相消其ハ取中五ハ右ニ箱館表ニ白
中五ハ美故同不ニ白諸取中昔中諸ハ受下

海舟書屋

相成を當地ニ白諸取昔中同且何以否相分
下中諸ハ昔中五ハ二月右ニ政府ハ伺之上ニ
至之而も強及換投六十日中終ハハ否々相苦
彼中諸ハ受今日在初と一と六十日と定其
以高港ハ取是被下取向昔去ハ朔日中受ハ依
之魯西亞條約寫出是ハ白ハ其支取之美ハ此座
ハハ右日限若十月下旬迄ニ右寫當地ハ此廻
一取下ハ取仕取身取ハ
一不田港ハ美額利方派至ニ其ハハ開港相成
ハ取仕取昔中五ハニ身同取ハ昨年大津浪ハ

人家不殘流失荒廢後一居公る取を寄公大用
 存之要之覺建之孫公名の中同公受社美括別
 急之公本ニ之之候中受公取を考公由中宜
 時分此方より下及沙汰音中酒公受兼代仕公
 一海岸測量之美アメリカニ之免許有之公昔中
 開公ニ舟彼方にも及以公美ニ有之公候中酒
 迄公且此度之教艘之取酒未仕多人教ニ出座
 公島沖出波投使初メ由家堅固取其外にも取
 緋向別而入急公取中酒迄公美ニ出座公候之
 取將初メ其外にも取下公品書蒸氣取款貢之美

海舟書屋

下付差出公模文字和解差上中公模文字を宿
 次之方より差上之申公以上

卯九月

荒尾石見守

川村對馬守

別紙

惣督言人

一 風織縮緬

式端

但 紫取 絹戸色取

一 紫縮緬

式端

一 緋縮緬 志 端

一 緋形身縮緬 志 端

一 蒔繪蓋物 志 箱

但加賀縮袋

一 蒔繪廣蓋 志 箱

但右同以

船將三人

船將次官三人

一 風織縮緬 志 端

但紫色形細戸色形

一 郡内鶴 志 端

一 蒔繪紙 志 箱

但黄色本綿包

上士官十四人

波戸場ハツテイラ 雨紳士官 六人

一 青貝子箱 志

一 傘 志 傘

通辨官志人

一 青貝重箱 志 箱

一 錦出蓋物 志 箱

船：士官六十六人

一 漆舟四

志 枚

一 錦出蓋物

志

通辨人吉人

一 編縮編

志 端

荒尾石見守極

川村對馬守極

永井若之丞極

浅野一守極

スコートベイククト

マリーヌステイルリンキ

要用中上公事

海舟書屋

我政府に命を固て申上るも大難利大沈亜并
イールラント之女王より命を授け仕掛茲氣遊
私志被お建させ日本回帝を信義相結度希く
微として送進上波の義に由座に

一 右私何比着仕に式何とも不相心得に得る日
本何地に港に右私送進中示下度且
又右私若岩渡士官或ハ檣檣相心得に者有替
宗組后に宜い式示下度相頼に

マリーヌステイルリンキ

ウインセストル名長崎におろく

千八百五十五年十月八日 廿八日

七二八

同年十月廿五日相濟

五百石以下清目見以上以下同想願二男三男
厄女清水附之者浪人百姓所人右之今殺根夷
地一俸上知之俸出之二月山嶽中人家人之門
風寒暑濕之厭ハ以山野之跋渉一骨骸之固ハ
文武之修徳心勉ハ者有相預ハハ之元身予ハ
愈一互任之俸月ハ者名茶予ハ百酒ハ中望ハ
且万石以上以下之象未主人見込之者ハ有之

海舟書屋

ハハ是又ハ是也ハ有書而之者有ハ是也
同奈野馬牧牛之養也始ハ一ハ食料業用ハ是
ハ是也類育方令根洞秩鉛山田畑巨枿薪柴伐
出ハ草及類植有石炭堀取具製作採藻鯨漢何
不考出産相成ハ類茶港有之場不ハ休泊所茶
店有立寄路ハ者有是ハ任也ハ是也ハ其也
ハ是ハ是也ハ是也ハ是也ハ是也ハ是也ハ是也
成格別出務ハ康頭礼ハ者ハ萬之奉實相紀士
人ハ身予ハ有立農工高之輩ハ地不家宅者相
酒ハ其上ハ賞賜ハ是也ハ是也ハ是也ハ是也

相心得者志之若其節述之類出之於委細之
美之箱館事乃一之兼合也

安政三年丙辰正月四日伊勢与相濟

近來異國私濟未二月日備向所用途多之要

整裡矣上且今救之地震二月日在津城門外与

山 津宮津靈殿等大破二月其上東海道節

國東節川之隈川陸地也路安破損設也二月支

之山子備之件有也答二月日在何れ也江戸屋

安之外地震大破及強候以ふ一月日柄柄二月日津

海舟書屋

城内外並与山 津宮津靈殿且川之山普話二

至之述 思在也皆公儀以入用二月日件有也

在備之不在件出也

禁裡津所方山普話二月日在天相智先格之也

五万石以上之面二月日築地方山入用款納之

在件有也法家二月日近來海寇防禦武備子

高号相入多之柄柄此度之震災等二月日於又入

費不亦多二月日拾別之 思在也今救之山築

地方山入用不及款納之件出也

同年三月九日 伴啓子

下田幸乃
箱詰奉り

評定不一
海防掛

是

下田箱詰表踏繪之表尚若く形替難免極表
付此上より三年迄踏繪等是合造り市氏之不業
柳也耳目二船也公儀中存之れ其長船毎以
多し百計ありて相伺公事

海舟書屋

十一〇

異國船の相渡欠之品之表

相伺公書付

川路左衛門尉

水泚筑後守

伊波左衛門

松筑駿河守

井上信濃守

岩瀬俊程

異國船の相渡欠之品柄之表
去年以来之仕
末更調公更及相渡欠之品柄
瀬戸州紙類錦繪控柄末

本石系細工小児玩物等彼方好任七相済来
 の受右相既物類近相済の而も女之の名義を
 是の公義は月彼私中ニ至る而も其支ニ相成
 り不之外細工物既物類不相済方ニもつ有る
 り一存去寅年丑墨利知回より通高預立
 り此許容之を長を戦年ニ及る而も預立
 相遂と仕成の故其長意接掛り評識之上彼氣
 先を和け此方より相済貫キル相ニとの合を
 以女之と同一の相を附け右等之品ニをも相済
 漸く押付の義ニ而も素より名実齟齬い多し

海舟書屋

義ニも此度の一は夷狄之語ニ身実ニ止奉を
 不中為得の相場合より先其任ニ相成居る事
 ニ身今更ニ却り女之の名義を立一時而目を
 改め相之有計方任の而も彼ノ憤を醸し瑣細
 之義より遂ニも争論をもつ引出筋ニ身先是
 進み姿ニ揺動強而其支ニ不相成相を相済ニ
 相成の方ニも有る也去彼方之望ニ任せられ
 ニ而も際限も至る相済の中相定重の
 後、右を去寅八月中下旬を以相向迄未
 此度等之至る一は相又一同評識之上相済

以名茶相酒不中名之也反調以受左之通相酒
以品

繪布編緇浮織純子類 糸細工物袋物類
塗物類

但城郭茶衣冠人物武者之詩繪之不
相酒以類

瀬戸物硝子類 傘桐油棧桐細工物蓑笠之類
但傘桐油之世上相場二拘り以受二舟
多分不相酒以類

木石細工張技紙細工提燈類

海舟書屋

筆墨硯箱扇團扇類

竹菱葦細工草及苗但高價之鉢柱類之不
相酒以類

海草貝類細工物鳥獸之類但高價之鳥獸
茶牛馬之不相酒類

相酒不中品

津致有之品官服二相成以織物類

武器武具但硝石硫磺等武用二相成以品
通用金銀銅鍍但銅真鍮之類聊之金物二

老有之以物之相酒

其外鍋釜葉罐烟草管等是支也。又船中用之其長限。相濬也。

刀劍類并農具大工其外職人道具日用又物。

但破方道具小刀剃刀庖丁等是支也。支者之也。其長限相濬也。

油瓶燭但車更瓦支有之。船中入用之相濬也。

漆書籍地圖類并城郭之繪衣冠人物之繪武者繪茶根藝。近之繪紙類但車更瓦支也。

海舟書屋

船中入用之相濬也。

木綿麻類但右同也。

右之通相定也。中亦第一級波取等修後之相

用此木釘銅也等之類之別限之也。其長也

見分者是是車更瓦之為是屈之上脚之分也

並之相濬入用也。分之分也。同上相濬也。

之相心也。且制禁之品并右外之波方より法

而預也。其時之相同也。右之分也。右之長

海箱被等之支也。由關係也。其長也。其長限

り是定也。其長也。其長也。其長也。其長也。

昔中庭源安存込在在の松子昨年以來有板在
 在の支死向一同別御の通中互此上在源以不
 法之所業相暮の白を土地一併氏産にも拘り
 のの之あり以直に幸福を引能て中畢竟氏由
 二代り氏産を振しに高類の事故容易に屠殺
 之多汚法度にも有る愛愛惜を餘り日本全
 州に及の禍根等引出しに而を汚建法に由大
 昔にも廣りも松之悔に二相成即と百計方甚
 是支勿論此存之義を水支在始末中披延るより
 不と源存中此の義に安存の故在業に怒を

海舟書屋

朽柄の中廻りと安存以後必長く中出登く其
 長二才の挨拶仕に二源根籍を如何松二相成
 其細計今更婉曲に断切、留に其ハ以居難く
 二安存の事是非有相取て中存此法に二二
 嚴重に中切の外に其産の依り別紙急接掛支
 死向中互の書面其後入沙覽盡の事否早く由
 不知此下並の松子願に以上

辰五月

異人根籍其外之義に其心身の故

力石勝之助

安間純之進

鈴木尚令郎

村上愛助

鈴木源四郎

昨四日此後之飯を以安間純之進鈴木源四郎
 咲和に相就意接仕公飯といさふ別紙意接書
 記し公通に白紙將由張高懸之振子相見即
 時和申紀方ハ勿論別紙式渡に申さし嚴交

海舟書屋

穿鑿為波公振申和申水支之内ニハ心當有
 之公飯申出況入公食ニ有之更ニ水支共百俵
 二之遣却以多し公限申出如兼之懸申在在公
 牛肉之更改申申出右山酒方ハ許容無之申
 竟和將長士官等津圓に之都合方不引屈故牛
 肉山酒方不相就也。相合内更士官水支大茂
 如を懐き振也去士官ニ之兼忽之振舞先之
 之公此九水支異費等ニ至公白之去より頑愚
 蒙昧之旨の大何之各別申之只安將官を恨
 惡事徒黨以多し左を制し公此之右を托し公

小舟士官共此返歸向中舟並此此是將内心
 不收を懐き互に相譲り戻はせしむる方不
 屈折の由は酒を之上に取中人氣小舟強換此
 上制一方之免來合中受此二月品之辞理を
 一況得小由一何れ小舟返歸之旨粘之誤論
 任一息養知之額之由此在何處小舟再酒
 下ハ小舟許容有之度候頻々申立此右二月再
 三熟考仕此要右等之情念根強く存立此上
 彼等再酒再之酒之度毎同振不業及此此
 下り也今取同振之誤判之及取將論入此上ハ

海舟書屋

先々 津威權相立此此在若彼方一此有之
 取將一向取合不中取中二左振之邑の云之
 後不法之來有之此此捕押引酒此振中切此
 數百人狼藉此此此此此此此此如何之仕
 其此之津不並振之此此此此此此此此此
 之且其此之此此此此此此此此此此此此
 由之此此此此此此此此此此此此此此此
 之制之兼此此此此此此此此此此此此此
 氏 津威光之此此此此此此此此此此此
 計其上吏人此此此此此此此此此此此此

右之社之也葉之是悟仕之義之此法在沛國俸
 之安危如何計正懼奉身之被劫任之此之氣
 而厚之正作酒也此義之此法在社上婉曲之相以
 此也沛為第如何之有之此之一同受以痛心
 任之已之昨年中下社之及之也牛因之義之付
 而之此法痛心之此法之義之受果之也此法見之
 如之一同不平之懷之此法之相見之為此上彼
 之授之不蔓之因連之此法之沛沛容相成之此法
 作上之外他事之在之互覆之限夷情之奉之此
 法之懇願沛沛牛之酒相成之共尚又何之此法

海舟書屋

中之式其初之編計之此法在右極是誠之也之此
 限也之之先之昨年來之授極之以此相考之此法
 諸靈共生牛一德之連也此法極相成義之身殊
 更嘆夷片之也八生牛之酒相成之也一時必平穩
 之相成之也存之也保葉之重之沛國紫之義
 小付急速沛願識此法定誠之為成也此法合之也
 件更係向之如何相心得之極沛空若中上之通
 此上平穩婉曲之相形之此法在社上度之也而也
 昨年來漢列之也上之而高今之迫之也勢之眼
 若章端之也口之相成之且又此同大名人教之

儼も移く中論並んは在屢夷人在怪談心多し
 公を遠識は存鬼神人動も不穩も昌如何
 成り即之其色も心痛任ん一俸私在公素く不
 才淺智之身を以夷人接對之重任也忝く任ん
 善之存心力を受し相勤んは在由敏意を由貫
 徹任ん公不相叶又是時を由百失ん由と清由
 節之強相成素く不堪其任任ん少已公入ん
 善之由瘡ん由つ色も今般之善と赤心を敢
 し中上ん善之由瘡ん由厚由質察由瘡ん由振任
 存善存ん以上

海舟書屋

五月五日

下札

本文生半溜方不相成候先以申達候後終由
 用不十イヒル取將士官テント通洞岩瀬
 深四郎申中同んを長崎ニ由と上陸遊歩等
 不相成候申同箱鼓ニ由と澤山有之牛也酒
 公事不相成申同んは在若長崎ニ由上陸
 遊歩い由し箱鼓少く牛を奪去ん事出来ん
 如何い由し公津國法ニ由亦兼り存言申
 同んは在深四郎差我為と左様と事更ニ不

毎々取らざる其偏は下中と名相若し
 要其義、不及其詳心法は亦と取りんは
 由中因の義も有る由同人中同意より不
 可留義、一乃有るは法を備ふは亦も強
 く法を從くは何れ成不法を備ふは亦も強
 計其義ハ是違同振之無合、白打之義も
 相成り或則、奇右等之心法亦兼るは亦も有
 るは振仕度事好ん

書面并別紙之類之由互調ふ要昨年中牛肉惣

海舟書屋

法之類、身白之竹門下此与増減致しより不
 く相同の書面は成由下は長短を評議仕上
 る類中有一下田表、終白、要其理加便長、同
 振態預之長相好ん振合も有る之謂諸港、終
 而相濟の由も不之能く法と也幸其法應義次
 身、も相同北緯法寒之地、も有る意樂用之
 為定額を立相濟、外、津國地中、も相濟の
 義ハ變而不相成、既歳歳中酒先殺与人より相
 同ハ故高橋子、互建其用より老牛等相濟、
 法長之善好ん左ん法之同之類、法應義次、相

同公為先收中五公通收畜場設五年、定額を
立免牛等相酒、中志共加、外場、
之、
一、
上公以上

海防掛

函致甲斐

土波丹波

筒井肥前

務及氏部少輔

海舟書屋

一色邦之補

岩瀬修理

大久保右近將監

牛乳之儀、
及、

及、

井上信濃

尾田信濃

當長、
養生相用、

右之相續の要強出來候支死向之者是也及此
中ハ依之其後之對話書是冊相添此候中上ハ
以上

辰八月

西人對話書

八月八日調役並勤方森山多吉郎調役下役
麻後源之丞通洞立石湯十郎立合山善清後
見留六笠江令郎山小人目付坂井後茂於玉泉
寺淨面之亞墨利加官吏ハルリ又
ハ人ハ 一急換抄年白

海舟書屋

上ハハ飯左之通江度ハ

一急換抄年白

此方

此御當所勤番之者ハ牛乳之養分中五ハ飯を
以奉以中少ハ食右牛乳之回民一切食用不
被疎ニ牛之土民在耕耘其外山野多ニ土地柄
故運送之為メ飼養ハ而已ニ別候蓄殖ハ由
一ハ養更ニ之ヲ掃下ル見牛生乳ハ養育之ハ
而由乳汁之全ク見牛ニ與ハ見牛之重ハ生育
以由一ハ奉故牛乳之給ハハ食一切相成ハ

有弊およひ

彼方

一 山沙治り類兼知はる左様なり母牛を相
求宿釈子洋に乳汁を絞りぬれり仕

一 只今中入の通牛を耕耘其外運送る為計一
己の故主人は大切といふ一人に譲渡ぬ
交り細相成ぬ

一 種相成ぬはるり波方なるを食用其外
尻支る品遊り中五穀も有るなり相叶
ぬ夫々を此配意に下宿相預ぬ

海舟書屋

一 兼知いよひの整ふを察重なるは當り波をぬ

一 マギを當地より有るなり

一 當夜も勿論通國にも一切に有る

一 左なり香港より有るを此處に野山に言

並ぬを如何有るに極く

一 山野に放飼る養を種相成ぬ

一 構門に尻並ぬ養を如何に産ぬ

一 豚同振る己の故構門に尻並ぬはる養を苦
かひる交放し飼を種相成ぬ

右の白浪判年一同引を中ぬ

我邦開港の外人と接遇を初むるは
 正々たる小事を争ひ抗辯而端遂に彼を怒
 を激し延く存奉り及ひ其談判常日田道を
 欠き以て國家の長計を誤ると少くは是
 其外國の事情を通せざる、故といへば亦
 其要員に專任せざるの失として大小事務
 毎に政府の指令を待て奉り後ハ慣習あり
 の故たりお政府の指令ありものハ何れも
 早むるをといふは固先を改めざるは

海舟書屋

大小監察若くは勘定奉行の評議し出つと
 いへども其原案を皆其不変徒目甘小人目
 身或は勘定方の執筆小任に此輩賤流素よ
 更卓抜の見あるよあはれ徒に舊例舊規に
 仍り其考案を草し長官これを名く漫然捺
 印し俗言列と云これを政府に呈し政府これを
 更く指令を此奉因襲の久しき弊として破
 りてハハハ嗚呼昇平正事の時といへば其
 危殆ぬ何ぞや外也外國訂約の始に在り其
 接遇の一言一擧天下の安危に同日の日

於てを也之が委員あり者專使の權あり
て何事も意の如きを以て其不利を知らず
いへる智く瑣屑の事を抗論して彼の不
快を醸し本機を誤り固より慥むる是ら
る也

辰八月廿五日

海防掛

差

英氣私運用其外為傳習長考表に蘭人此等

海舟書屋

道々傳習文の者正其是の要同要に白く後
く仕来り有り被送事六ヶ敷宛之而己
舟子度々修業も細相成務古人に於て日教
相掛り公内にて帰心細止場合も有り連り十
分修業の届中る迄航海術等之を於て更
多に公る一向二年少壯徒之者相撰總督一同
之若引纏咬啗也表に正其是の事修業の者
変心以多し航海術を修すは修業出来し後
復来り弊害を無念以多し公の除限も無
いこの道も居るく有り相届公候伸公期を有

る發字不被是之議論ニ不拘傳習人咬嚼也表
へ正虎意方ニつ有之其利害得失甚之甚余い
よりつ正中國の事

和蘭英氣私將持糸の風説書和解おま以
若荒増大急紀通詞共より中三の書付

嘆回アトミラール官名セームール人名と中者函
館へ在裁布路長崎へ酒来て仕扱中出る

一當長酒来と和蘭私將アビユス人名唐國香港
へ立寄る長同不滞立と嘆回在りホウリンク

海舟書屋

人々と中者面會仕る要別版名約為有依同人發
道ニ長崎へ酒来て波也唐國小強虎並用向有
と二ヶ月初も際取つ中も其後長崎在り不
へ茶以中上益吳の板相頼の飯私將中出る右
之候進之に書付中上名中出る

一右ホウリンク人名酒来と美々交易節と美々舟
条約為有依在出る美々舟有と名中出る

一暹羅嘆回交易と美々舟有板の條約書と口写
日本政府へ在出吳の板右ホウリンク相頼の
為進の在出つ中名中出る

一 此詔之無氣取打立方格種出精仕公以在尚衣
 進ハ何分間ニ合不中右之円是種ニ尚衣
 春進ハハ甚非是出公取之仕既ニ取号等相定
 ヲフハニと相唱ハ取既是種ハ今暫ク昌取
 中級中出公

一 此詔叙附簡者合不中ハニ有別後極方中附重
 公尚衣持来不中取来春此詔無氣取酒来之良
 有ニ合公取出精之仕名中出公

一 歐羅巴列平和ニ相成諸國既ニ交易益盛ニ相
 成公ニ有白ニ交易益之美ニ有進ニ外回より

海舟書屋

日本ハ使臣取越中此取用不相成取ハ
 免角唐和蘭國ニ有相妨公取外國節ニ於て疑
 惑仕公ハ和蘭國ハ不中及於此回ハ不
 相成此詔物等此用相動ハ美也甚以斟酌仕公
 取當時之撰取ニ有之何也ハ是非交易相同
 度外國一統取居公美ニ有厚此取考之上
 取用相成公取仕取精ニ中上公取ニ政府より
 中身取ハ取旧来唐和蘭ニ別取之美ニ有容易
 取外國節ハ交易取免不相成公取ハ政府も
 取有考取ハ取在進来の時停不取止奉美ニ有

一 相成券は、此度の八和蘭政府と吹拳を以て
 回第へ交易の免相成の故に、一併承認の場
 あり外回第は、對し和蘭國の面目より相成於
 而し用第相勤のより都合宜敷の、付替の事
 預公報中出の
 一 昨年条約書に消除仕の市中は、高賣物に之
 之土産甚全給の、入用は品に相調の、英葡
 人へ日本通用金銀又ハ銀札は濫相成居右を
 以相調の、又ハ箱籠下回同枚洋銀を以相調
 公券の免に成下留且右品は出島持入之、箱

海舟書屋

館下回に於て別段の事あり、印中語の、
 之を銀に、身出島門番人之見改を、清並紙持入
 公券の免に成下留、右條約書は別章の、因に
 相成券名中出の
 一 本方高賣第は相成不申の、此度販為物高法第
 是通に通に教不相成に、度不相成の、紙仕度右
 代銀日本通用金銀相成の、譯しハ、之に、
 共品物而已に、限り、公、急増不仕、
 高法に度は相成不申の、身申上公、
 条約書は別章の、因に相成中、

一高取入津之上七箱館下田一見之し七尚魚乳
取高取如枕一見相瀬高港へ立席八名中出
右之額加比丹船將中出ルニ舟以渡中上ル以上

同年八月廿日

水取籠渡号

水取籠渡号

長崎表に英吉利船浦来り額右魚捕方長崎
幸河並立勤山目甘比山任七相成居ル比及
此上和蘭船將より中三有るハ使長等浦来

海舟書屋

品々中五茶条約ニ關係シ公發額計中論方
之次書ニ考テハ此國憲ニ相成り額計其方
候右先取之長英吉利船条引受取扱ハ取也
有るハ長崎幸河中渡魚捕下及公方都合
由宜ク有るハ為時宜次書長崎表へ取取也
ハ此上被地より中誠ハ次書ニ考早ク出之中
酒ハ取也一有るハ為用意酒一ト在在ハ
右於新設船浦大和寺書付酒之列座之

和蘭領事官トニクルキユルレユ又所

一高取入清之上七箱箱下田一見之七尚魚乳
私商不如此一見相海商港へ五席の各中出
右之額加比丹船將中出の二舟以度中上の以上

同年八月廿日

水地籠後号

水地籠後号

長崎表の英吉利私通来る額右魚捕方長崎
幸の在る勤の目付は此任に相成居るは及
此上和蘭私將より中三有るは使長等酒来

海舟書屋

品々申立茶条約の關係は公發額計中論方
之次書二考七八の國憲に相成り額計其方
後右先取之長英吉利の条引受取扱の表も
有るは長崎幸の申渡魚捕及公發額合
も且つ有るは時宜次書長崎表へ此表を
以る此上被地より申渡るは次書二考早に申
渡るも有るは用意消しに在るは
右於新設の溜大和の書付溜る列座之

和蘭領事官トニクルキニルニユ又肝

要の末中上の書面和解

川村對馬

去年拙者より和蘭政府へ呈し告書小同三つ
成程ハ日本政府并諸侯之需ニ應じ命を下し
て其國産物品を日本へ送るに事を一一定波ム
也各各需用小應じル事、和蘭政府小於て至極
懇念お記奉不能ム

和蘭政府小てハ時勢の變り至記を恭見して
其換札ニ應じ日本政府小て其誠意を替り評
定相成度者度、以實意以勸中上ム右ニ付隨

海舟書屋

一と變ハ日本國の和親交易ニ条約不結度
ありん外國ハハ都而緩優交易の免許小ム右
快々緩優交易ニ萬物自然ニ運送小して日本
の國領今ニ保握ありしも最早相續す魚の
以即今至極の急務ニ相成ル交易航海ナリ諸
國と和親を旨とし日本ニ於て緩優交易有極
ム外實ハ他事ニミル外國より緩優交易小付向
後連も拒絶ありハ幸福の日本國ハ宛て航海
ナリ世界數々有の諸國一統と聞歎小つ及和
蘭政府様ニ見宛ル

和蘭國王も既に他界有る前王日本に奉る月
 遺書有りし以来暫時も怠惰不致一も日本
 回禍災の氣色あるを不致保護せんと志願あ
 り然も當今變化之時勢又終る日本の内領
 一報ありさるる如りも二も和蘭政府の神
 妙誠意の希望不任也是迄和蘭政府もハ極
 極有る奉虚奉も非ざる極の證を外國政府も
 知せ度志願も右希望もハ外歐羅巴諸州
 の國民を除き和蘭回日本回法古りの故を
 以て和蘭政府も不致恩惠も對ふ心を以て

海舟書屋

日本國として交易航海する國民一統群中の強
 國たりしめんとの奉も和蘭國王も右希望
 の成程此奉も不致心懸る為互且故王遺跡
 を能く存意を遂んとすも怠惰不致其今の
 國王も於ても其道を尊る奉も
 日本政府の回政を改換せんとこの故を以て其
 希望の品を調達せしめられんハ和蘭國王の
 諒告を信用不致遂に奉も思考論も迄政治正
 交國民の望ありんとの奉も都て緩慢交易免
 許ありん奉日本政府も不致兼詰つ有る奉も相

考中ハ若ク左ノ如ク日本軍艦軍需等需小
 一ハ本ハ外國政府へノ外見日本國ノ事ト
 一ハ和蘭政府ノ國政廉直を不没して速ニ日
 本を法固たりしめ利益不拘り日本との交易
 一他ト不讓和蘭國ト限り振せんニ相見ハ中
 一右ト又一若王ノ遺命ト依ク至極誠日本政
 府より貫通の證所望ニハ且其語今般至極急
 務の懇命ト成ルハ既ニ和蘭政府尚更希望ニ
 一和蘭政府ニ日本政府軍需其他ニ品調達致ル
 一を商家同族不引支ル義ハ希不中ハ版出心持

海舟書屋

証下度ハ

日本政府不ク外國ノ民を其封内ト至らしめ
 一歳免許有テ歐羅巴同族の香煙有ルハ白を
 一此を又義ト和蘭政府不於テ相考ム依ク山改
 一革の諫告日本政府ニ不中上ハ白不叶ト相考
 一中ハ其故ハ外國政府不於テ清商國ト一統緩
 一優交易の志願を遂ム證を必見テ中族相見中
 一ム
 一年來和蘭政府の希々ハ和蘭國民等緩優交易
 一免許の義ニ付出島高嶺の義ハ且當座ニ所を

と見受中の批者尚亦考致ハ日本政府商
時市布を教多の品物も通くハ指別上品と
中者至る同様の品合ハハ外國民より調
成ハ方和蘭方よりハ多分違ふて安價に相
下中ハ

魯西亞と日華との条約中第五ヶ条に箱館
下田文ハ既ニ魯西亞人後優交易の發端ハ
用ニ相成ル為和蘭より力額利太泥亞國民
之類も右場下ニ於て同様の交易中立出來
美ニ其故ハ右三ヶ國日本も右様の条約

海舟書屋

中免許の廉多き國民有るハ同様に免許有
る方ハ之合之規定有るハ
右の同様の品物も替りて政府不限りハ
極ハ至る魯西亞人より究の外小品を附
ハ依る今般の通交易免許有る右条約中
之租税等も極有る方ニ於ル
長崎港之類ハ他の外國民ハ交易免許
和蘭政府の希望ハ日本政府に於て實ニ
切之忠告津貨密に有用有る長崎に於て
和蘭人其他条約も極有る外國人ハ後

優交易の免許有る爲事ニム

日幸ふく代り物として之相済ム品も之を示
多分ニ品持済ム分も日本ふく左様出入用正
之概山如念有るハ海共拙者勸考之次第ナ上
ム教之優優交易を因起ム貴初より品物十分
百調ム回ハ一々回も至ク交易第ハ只其率を
高賣之要ム故ニ練磨ニ因テ自然ニ代り品を
拙業ノ生産相成ム也ノ之ハ外國の高取代り
品を不減して之益の注来ニ心算済ム政府も
至クハ外國政府の希重ハ日本政府ふく只交

海舟書屋

易免許ニ相成免許の外國日本人と賣買の事
ニ付由制限之ハ概済度至ニム右の外優優交
易第ハ外國より持来ム品物を又外國ニ相済
ム義も有るハ彼令ハ和蘭高賣之ヲホルトル
コトヒイ等日如不持済マ中ム此二品日本ニ
ても價之之ハ海共魯西亞人其他の國民免許
の済之終クホルトルコトヒイを請ム如ハ日
本ニ於ても右二品其外許多ク品物を直接價
有る概ニ相成ム日本の高賣々概の品物を賣
買済ムも利潤を得ム概相成マ中ム又日本端

在の外國高賣ふも外國の品物亦ハ日本の品物
 亦ても高賣つて得見込ニム右此の高賣者ト
 ールスクラントト外國より持渡ふ物を又外
 國に渡す高法の名と相唱中ハ日本政府少く
 ハ外國政府の判断の上品物出入ニ有相當の
 祖税出取立て相成ハ振合を以右トールフ
 ル不付ても相當の祖税出取立ト相成義ト
 ハ又第一の食種の輸出後令ハ米の如記ハ朝
 限の由定出禁制有テ日本政府ニ有條約中ニ
 規定出立相成且其外の品々武裝の如記も改

海舟書屋

府の外賣買不相成昔由定テ有テハ故ハ外國
 政府不終て日本滞在の外國民勝手ニ天主教
 を傳ふるを希を渡ハ日本ニ有天主教を傳ふ
 義ハ外國人希ハ義ハ有テる交相考中ハ由定
 今既ニ日本國諸國政府と和親百條進奉相増
 中ハ但右ニ觸れハ義有テハ由定ハ外國
 民信仰ハ有奉を侮蔑警敵ムせられハ奉右拙
 者見込中上ハ義ハ古より仕来ニ有同テ年々
 長考其外ニ終て一方ハ由定ニ踏繪ニ義ハ由定
 踏繪ニ義ハ由定ニ長踏繪ニ義ハ由定中

付垂る迷惑より由相聞ふ以来も勅諭有るに依
 被度申比丹存念より由若し日本政府外國民の
 意に觸れらるる事由取止有るに外國政府
 之終て深く感懐被ふ事と考へ申す且由取止
 相成ふに外國政府其國民永く日本へ和親を
 旨とし交り被ふ為別白都合宜敷事基小に有
 りと勅考仕ふ天主教之義ハ条約中より定
 相成ふに依ハ子細之日本政府不致て右教法
 危くと思ふに日本人士勸ふ事如何に
 此防出未つ申す日本為政府へ拙者より取申

海舟書屋

上も右天主教實に日本を危くし不親交
 其證期に由試つ相成事小
 和蘭國と日本國との条約中より長崎下田箱館
 之三港小致て和蘭之婦女小兒等免許の事書
 載せらるるに依和蘭政府の不存ハ此条約其
 之中致小有る事条約中和蘭人之有るに依
 若婦女其外小兒も同致之義に有るに依
 大貌利太泥亞魯西亞政府へ一同其婦女小兒
 等並港之場所へ連渡ふ事免許如何と致惑致
 此致ハ至る既ふアメリカの婦女も同致不致

在公當年日本海海の和蘭船武艘之新類在日
 本近來子石連度者咬嚼巴政府へ預出公法在
 此長ハ其發見留中ハ右ハ以免許証之概心以
 中ハ故ハハ之々^本只利廣和蘭領事官也して案
 約規定多明ハ初度心以ハ於別而希也以
 ハ之恒例帰帆ハ中酒茶向後余看ハ付之の仕
 方更之規則相定於長崎寺社肆店休息不等ハ
 謝洋其外調物等之拂方之發取取中留ハ
 和蘭并諸國政府之音信備之付希也の義ハ長
 崎入港の外國人日本ハ之確執之者ハハ於

海舟書屋

同所也勝在相對一交接以其者在出島和蘭
 高館へ發出ハ之概發留ハ此義ハ相互ニ禮義
 在之ハハ規定ニ付究て日本方より一廢たり
 之由ハ其留方之易發相密中ハ一律拙者見込
 之次者也ハ見込中上ハ上ハ外國海軍取於高
 所高鮮島裏之て碗入極端取を以宗之り發振
 種ニ此二件之割楚ハ其主役ハ以達相成ハ仕
 来ハ最早永續波り發ハ取或ハ海軍取之主役
 以後右取之英相守之ハ武實之發發と存ハ元
 来強國之人氏以長和蘭取の港門ハ禁后ハを

見港外へ其私を繋ぎて其甚き不慮りて
 小方之公實心以勸考相成否公向後外國の私
 或は海軍私和蘭私の通達不入港免許相成指
 揮汝は福私を以系込ん奉杯ハ之之只禮を正
 一和親等之奉ニ身諸奉条約子規法を立ん迄
 右國法尊恭被一吏進要奉以より免許おく
 上陸為治る處方以頼相成ん私有之度ん此
 書面之月小方之公願之由該判仕ん々条相極
 一同免出申ん

右々和蘭國王大全権拙者也

海舟書屋

日中大君之全権之變換名列治ん既小百極小
 相成后ん条約書之追加小治一不百教片百掛
 相成ん私任否否存ん以上
 曆教子八百五十六年八月廿三日丙辰七月廿
 三日於日本和蘭領事官トシクルキユルニ
 又記す

八月

荒尾石見与極

川村對馬与極

永井若之丞様

淡路一学様

七五九

英國の引取ムスコートベイナクト官シルヤ
 一メスステルリンギ人宛て君之書状落子い
 多シム大額利太泥亜回之日幸と和親ニ條約
 有シク余ニ付入由意右ニ書載有シムニ額
 利太泥亜私民率最由恩恵を蒙リ由國民同様
 由取扱ニ規措マ有シク和蘭人唐人日本と是
 近ニ同シ依テ免されル規定を別措たる旨
 且ニルマ一メスステルリンギ右々條ニ付中

海舟書屋

述ハ義ニ意味相違ハ多シム同人ノ不詳ハ予
 八百五十四年正月十四日條約書ニ各列以
 後ニ額利太泥亜私率和蘭人唐人ニ免免ハ
 同様ニ規措有シク中ニ右日限以テ免免
 免ハ規措有シク用中ニ右意旨ニ付日本書載ニ
 由テ其意齟齬論ハ居ム右々書五々条ニ日限
 書載有シク故ニム
 一依テ君希望ニ由ムニ右齟齬ハ次書額利太
 泥亜政府ハ拙者より申立ム様ニ事ニム
 一拙者申上ムニルマ一メスステルリンギ美

日本官之地方と廉直和親之叢焉而極意志
望有之と云右意味遠之義額利太泥亞政府に
申出公隨而極者政府之命を更古之義入此種
此と條約談判者別格之廉を免究名判之義よ
り唯和蘭人唐人相用此規格同格之義心勉且
右別格之廉を此以後通例と不沙之義を見込不
申免頭之義よ右不為之義額利太泥亞人之好意
を以日本政府の意を主條約中之免許を極意
請之義公極向之義

額利太泥亞女王に取ウインセストル於長崎

海舟書屋

曆數千八百五十六年九月六日 八月八日

スコトベイナクト官印唐唐四海
額利太泥亞の親督

ムセイムール人

リッドルスコトベイナクト

レルマーマステルリッキ

條約書五ヶ条に和蘭人唐人此取扱之外と
有之副章にて是迄長崎港におろし和蘭人唐
人免許相成此別格之規定も相有之有之其
次之章に和蘭人唐人に千八百五十四年第十

月十四日以前免許有之の事而已相省と有之
條約第五ヶ条懸雙に於て此方知れり希
二條約第五ヶ条八時日限に之れに二條約文
解七此方知れり不致符合に依り其旨其政府
に於て此條約第五ヶ条に有之通嘆咭喇政府
に條約文解有之否の事

是

和蘭人唐人ハ別段に規定すべし付船利太泥
亞政府に書面を呈進し受右に付此長史君より
亞中立の事も有之に於て右書面船利太泥亞

海舟書屋

政府に於て是れ出の概昨來既ニ交渉相成后に依
り右書面船利太泥亞政府に二呈出奉り歸し

又コトトベイナクト官レルニハイルセイム

一ル人奉昨日長崎に奉りより受取の書面或

通嘆咭喇政府に呈送す中

一 船督長崎に滬東の滬船に二命を下す中
七 奉り而して其國の取に終る迄に之れに
道中港高群島向ふに駛入是其後内港に挽入
る免許の有之との事ニハ

額利太泥亞女王取ウインセントル号長崎に於て

千八百五十六年即九月十二日 高辰八月十四日

法度書

一 入港之船、高祥島船に破入及人引合とて待奉

一 葦砲不相成奉

一 島之多り在上陸不相成奉(此條遊白書改奉)

一 海峯浅深測量不相成奉

一 用奉所ハ福袋及石中五ハ一通船に遊

海舟書屋

考相對之引合請へりさる奉

但相對之品物贈答賣買坐つ禁奉

右條之相尋へり

安政三年丙辰八月

長崎奉行

スコットベイクト印商唐回海

額利太泥亞女王の勅督

ムセイムールに

一 奉行所支配の外遊歩不渡奉

一 市中上陸波戸場ニ限奉

- 一 士官之外上陸不許事
- 一 市中ニ有る物を買入事
- 一 人家に不入事
- 一 一群よりありて遊歩事
- 一 業内者之意を強ひ不押通事
- 一 障りある日ハ上陸不許事

川村對馬与后列

永井玄蕃后列

国取駿河与后列

安政三年丙辰八月

海舟書屋

川村對馬与后

永井玄蕃后

国取駿河与后

上陸之儀ニ付昨日貴官方の申書而之返答左
申述ム

一 上陸之儀ニ付一々条々ニテ条右ニ於テ改
正及圓々の規定ニ相違以多ク居ル且和親
互信之概として新々案組テ者和親圓開港之
場石不おるニ其端立申上陸之儀障ルニ其
取中ノ申回込ム其申書速急ニ白紙申述ム

一 親利太泥亞女王一隊軍艦極極者配下之者。和
 親交易初敷之間英官方より証免の優優
 多ハ極者相心得其後親利太泥亞政府ハ中
 立ハ
 一 奉行不支死地ハ該ト不相心得及且六ツテ
 者次方ニ其通り以多ハ英ト強強義活ハ
 一 身二々條市中上陸ト表通之上陸場よりイ多
 一 身四々條市中ニ買物不致極依市場より一
 買入音相心得ハ

海舟書屋

一 身五々條人家ハ不立入在寺社茶市店一見
 一 不苦音命を下ハ意ハ
 一 身六々條日本車以所の需ニ急ハハ為時宜ニ
 一 身七々條右ハ該上陸船体ハ緩慢ト拘リハ英
 一 強強義活ハ也去條約書中知親并極意ト不
 一 拘沃拘相立ハ英ハ日吉以ハ日沙治恭敬ハ多
 一 親利太泥亞女王取ウ井ニセトル取長處ト知ハ

親利太泥亞女王取ウ井ニセトル取長處ト知ハ

千八百五十六年九月十三日

高辰八月十五日

スコートベイナクト海軍督

ムセイムール

親利太泥亜女王叔ウ井ンセストル号長崎ニおろく

千八百五十六年九月十三日 西曆八月十五日

長崎西奉行

川村對馬与極

港旋之義ニ付スコートベイナクト名官レルニ

ハイルセイムール人 名 左ニ中上ル

舟一高鉾島船破入ル義兼知任ル内港挽入ル

海舟書屋

義紫月有之ニ延相待ル極ニ被ル

舟二火器相用ト為ルニ去理桑其外儀式ニ

在之由事以之免許有之為相預ル

舟三上陸之義兼知任ルニ去此杉山改ニ有

之旨ニ付忽督道白委受ニ中上ル

舟四深淺測量之義被任ル為ルニ去女王政府

より當測量之義自任ル中付ルニ其辰日奉政

府中上ル極ニ被ル

舟五由事以其外ニ用奉有之ニ在之由事以之通

編修詰方役人之有次を以中出ル極ニ被ル

ムセイムール

案に東照宮實紀及び異國日記に云度長十
六年九月十五日老臣連署して沿海の國々
へ靈船入津の制を令せり

一靈船を諸浦を巡らば何方ふも忌居せ
しむへし

一靈船に對し土人狼藉おらん故令せし
しむへし

海舟書屋

一所領の海岸へ忌船せし領主より嚮導者
を添へ其便に後ハ海陸いつくふも送る
魚

一靈船繫くへき津を見り小舟を借り人來
を乞ひ借與ふへし

同十八年八月四日いんらていら國今イッ
伴政村
の使をく免て長崎に來りその國主より

書翰並方物致種々しく

廿八日いんらていら國主へ返翰並し
押金屏風五双其外通商の條令を下さる其

文小

一 いきりてうり本邦へ今度と一先く渡海
 一 高船通商相遠あるへりら以酒海を
 一 了於て諸般免許せらるへり
 一 船に載る高物を其目を志して名
 一 へり本邦各浦いつりへありを茲居相
 一 遠あるへりら以
 一 若洋中ふく烈風日帆楫毀損せハいつ
 一 の浦に漕器もとも異候あるへりら其
 一 請に任せ府内にて定地賜りへり

海舟書屋

七三七

一 屋舎構造して其地に住居し通商をへり
 一 帰國せん事をいきりて人心のよふる
 一 へり屋舎もこれと同し
 一 一占の國にていきりて人病死せハ其為物
 一 ハ其國人よつハを為し
 一 一押買狼藉をへりら以その國人を頼の振
 一 舞あるハ取の轉賣をとりりて其頭目
 一 中まゝと令し下さるる
 一 此制文を以て考れハ國幣沿革の差あり
 一 といへ在當時の政略未だ者不拒去者不進ハ

七三二
七三三
七三四
七三五
七三六
七三七
七三八
七三九
七四〇
七四一
七四二
七四三
七四四
七四五
七四六
七四七
七四八
七四九
七五〇
七五一
七五二
七五三
七五四
七五五
七五六
七五七
七五八
七五九
七六〇
七六一
七六二
七六三
七六四
七六五
七六六
七六七
七六八
七六九
七七〇
七七一
七七二
七七三
七七四
七七五
七七六
七七七
七七八
七七九
七八〇
七八一
七八二
七八三
七八四
七八五
七八六
七八七
七八八
七八九
七九〇
七九一
七九二
七九三
七九四
七九五
七九六
七九七
七九八
七九九
八〇〇
八〇一
八〇二
八〇三
八〇四
八〇五
八〇六
八〇七
八〇八
八〇九
八一〇
八一一
八一二
八一三
八一四
八一五
八一六
八一七
八一八
八一九
八二〇
八二一
八二二
八二三
八二四
八二五
八二六
八二七
八二八
八二九
八三〇
八三一
八三二
八三三
八三四
八三五
八三六
八三七
八三八
八三九
八四〇
八四一
八四二
八四三
八四四
八四五
八四六
八四七
八四八
八四九
八五〇
八五一
八五二
八五三
八五四
八五五
八五六
八五七
八五八
八五九
八六〇
八六一
八六二
八六三
八六四
八六五
八六六
八六七
八六八
八六九
八七〇
八七一
八七二
八七三
八七四
八七五
八七六
八七七
八七八
八七九
八八〇
八八一
八八二
八八三
八八四
八八五
八八六
八八七
八八八
八八九
八九〇
八九一
八九二
八九三
八九四
八九五
八九六
八九七
八九八
八九九
九〇〇
九〇一
九〇二
九〇三
九〇四
九〇五
九〇六
九〇七
九〇八
九〇九
九一〇
九一一
九一二
九一三
九一四
九一五
九一六
九一七
九一八
九一九
九二〇
九二一
九二二
九二三
九二四
九二五
九二六
九二七
九二八
九二九
九三〇
九三一
九三二
九三三
九三四
九三五
九三六
九三七
九三八
九三九
九四〇
九四一
九四二
九四三
九四四
九四五
九四六
九四七
九四八
九四九
九五〇
九五二
九五三
九五四
九五五
九五六
九五七
九五八
九五九
九六〇
九六一
九六二
九六三
九六四
九六五
九六六
九六七
九六八
九六九
九七〇
九七一
九七二
九七三
九七四
九七五
九七六
九七七
九七八
九七九
九八〇
九八一
九八二
九八三
九八四
九八五
九八六
九八七
九八八
九八九
九九〇
九九一
九九二
九九三
九九四
九九五
九九六
九九七
九九八
九九九
一〇〇〇

統を吞併し四海を囊括するの規模想ふへ
し而して爰より西の巨の内地の鞏固堅實
増進し是のあり。故に近日英人の来り通
商を請ふも彼より一言これより及ては豈其
回兵支日久しく文献の徴をへきかきふ由
るをきく吾邦に在ても當局者注時の書と
徴査し参考する事あり。復古変遷の論議あり
等此奉給と忘れぬ如き々抑何そ也

開國起原卷三十八

海舟書屋

